

**[A年] 聖霊降臨節第6主日(2021年6月27日)****【旧約聖書日課】 イザヤ書 49章14～21節**

14 シオンは言う。

主はわたしを見捨てられた  
わたしの主はわたしを忘れられた、と。

15 女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。

母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。  
たとえ、女たちが忘れようとも  
わたしがあなたを忘れることは決してない。

16 見よ、わたしはあなたを

わたしの手のひらに刻みつける。  
あなたの城壁は常にわたしの前にある。

17 あなたを破壊した者は速やかに来たが

あなたを建てる者は更に速やかに来る。  
あなたを廃虚とした者はあなたを去る。

18 目を上げて、見渡すがよい。

彼らはすべて集められ、あなたのもとに来る。  
わたしは生きている、と主は言われる。  
あなたは彼らのすべてを飾りのように身にまとい  
花嫁の帯のように結ぶであろう。

19 破壊され、廃虚となり、荒れ果てたあなたの地は

彼らを住まわせるには狭くなる。  
あなたを征服した者は、遠くへ去った。

20 あなたが失ったと思った子らは

再びあなたの耳に言うであろう  
場所が狭すぎます、住む所を与えてください、と。

21 あなたは心に言うであろう

誰がこの子らを産んでわたしに与えてくれたのか  
わたしは子を失い、もはや子を産めない身で  
捕らえられ、追放された者なのに  
誰がこれらの子を育ててくれたのか  
見よ、わたしはただひとり残されていたのに  
この子らはどこにいたのか、と。

**【使徒書日課】 使徒言行録 4章32～37節**

32信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものと言う者はなく、すべてを共有していた。33使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。34信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、35使徒た

ちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。36たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ——「慰めの子」という意味——と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、37持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。

**【福音書日課】 マタイによる福音書6章22～34節**

22「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、23濁っていれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう。」

24「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

25「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。26空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。27あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。28なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。

29しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。30今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。31だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。32それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。33何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。34だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## イザヤ書 49章14～21節

- 14 しかし、シオンは言った。  
主は私を見捨てられた  
わが主は私を忘れられた、と。
- 15 女が自分の乳飲み子を忘れるだろうか。  
自分の胎内の子を憐れまずにいられようか。  
たとえ、女たちが忘れても  
私はあなたを忘れない。
- 16 見よ、私はあなたを手のひらに刻みつけた。  
あなたの城壁は常に私の前にある。
- 17 あなたの子どもたちは速やかに来る。  
あなたを破壊し、あなたを荒らす者は  
あなたのところから出て行く。
- 18 目を上げて、周りを見よ。  
彼らは皆集まって、あなたのもとに来る。  
私は生きている——主の仰せ。  
あなたは彼らを皆飾り物として身に着け  
彼らを花嫁の帯のように身に帯びる。
- 19 廢虚となり、荒れ果て、荒廢したあなたの地は  
今や、住む者には狭すぎ  
あなたを滅ぼした者たちは遠ざかる。
- 20 あなたが失った子らが再び  
あなたに告げるであろう。  
「この場所は私には狭すぎます。  
住む場所を与えてください」と。
- 21 その時、あなたは心の中で言うであろう  
「誰が私にこれらの者を産んでくれたのか。  
私は子を失い、不妊の女となり  
捕らえられ、追放された身であったのに  
これらの者を誰が育ててくれたのか。  
見よ、私は一人残されていたのに  
これらの者はどこにいたのか」と。

## 使徒言行録 4章32～37節

32 信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。33使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証した。そして、神の恵みが一同に注がれた〔別訳→一同は人々から非常に好意を持たれていた〕。34信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、35使徒

たちの足元に置き、必要に応じて、おのおのに分配されたからである。

36 レビ族の人で、使徒たちからバルナバ——「慰めの子」という意味——と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、37 持っていた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足元に置いた。

## マタイによる福音書6章22～34節

22 「目は体の灯である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、23 目が悪ければ、全身も暗い。だから、あなたの中にある光が暗ければ、その暗さはどれほどであろう。」

24 「誰も、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を疎んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

25 「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。26 空の鳥を見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。まして、あなたがたは、鳥よりも優れた者ではないか。27 あなたがたのうちの誰が、思い煩ったからといって、寿命を僅かでも延ばすことができようか。28 なぜ、衣服のことで思い煩うのか。野の花がどのように育つのか、よく学びなさい。働きもせず、紡ぎもしない。29 しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。30 今日生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。31 だから、あなたがたは、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と、思い煩ってはならない。32 それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみな、あなたがたに必要なことをご存じである。33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな添えて与えられる。

34 だから、明日のことを思い煩ってはならない。明日のことは明日自らが思い煩う。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・6月27日「聖霊降臨節第6主日」の日課主題は「主にある共同体」。「新約聖書」各文書を生み出した「初代教会」は、「主イエスと弟子たちの共同体」を原風景とした「使徒的共同体」として定義づけられる。原風景としての主イエスと弟子たちの共同体は四つの「福音書」で四様に示されている。実際の「初代教会」の実像を映し出しているのは、使徒の名で残された各「書簡」であり、体系的に語られているわけではないが、断片的ではあっても具体的な歴史的教会の姿に最も接近することができる。一方、「使徒言行録」は、「使徒的共同体」を体系的に描いているが、おもに「ルカ福音書」で示される「主イエスと弟子たちの共同体」の原風景に基づいて、理想化された「あるべき使徒的共同体」像として脚色されたものであるという側面を否定できない。しかし、それは「使徒言行録」の意義を低めるのではなく、教会が「共同体」原風景としての「福音書」に基礎づけられた「使徒的共同体」像を構想する道筋を指し示すものであるという点で、より重要な意義を有していると言うことができる。

**旧約日課(イザヤ 49章より)**

・「イザヤ書」は、ユダヤ教正典中「後の預言者」の第一に置かれた預言書で、正典「預言者」全体の要諦になっていると考えられる文書。特に「第二イザヤ」と呼ばれる40章以下は、明らかに前8世紀末に南王国王宮で預言活動をした歴史的預言者「イザヤ」とは異なる時代背景の中で語られた「預言」によって構成されており、預言者イザヤを一人の祖とする「預言者の伝統継承集団」の存在を示唆するものとなっている。ただし、そのような「伝統継承集団」がイザヤ以来途絶えることなく組織的に存在し続けたということの意味するわけではない。おそらく、実際には、預言者イザヤの時代から約1世紀後の南王国ヨシヤ王時代に遂行された改革の担い手となった祭司らが、自分たちの思想的ルーツとして「預言者イザヤ」を再評価することを契機にして、イザヤを祖とする「伝統継承集団」という自己理解を形成していったのであろう。その初期の担い手の代表と考えられるのが「預言者エレミヤ」であり、バビロン捕囚の時代を経て、多元的に営まれていた預言者活動が習合され、正典「預言者」としてまとめられるに至ったと考えられる。

・日課箇所は、「第二イザヤ」の前半部(40~55章)の中盤に位置する。「第二イザヤ」の預言は、バビロニアによるエルサレム陥落・南王国滅亡とバビロン捕囚、さらにはペルシアによる解放とユダヤへの帰還の期待という経験を共有する中で告げられており、日課箇所も、そのような歴史的背景を想起させる言葉であふれている。ただし、そこにある時代認識は、必ずしも順風満帆のものではなく、むしろ、帰還の期待が逆風にさらされている現実を示唆している。

・「第二イザヤ」の視座は、そのような「帰還の期待への逆風」を、諸外国のような外的要因としてではなく、「ユダヤの民」として再建されるべき人々自身に内包する内的要因として捉えている。そこで、その逆風を乗り越えていくためのプロセスとして、「ユダヤの民」の中にいながら拒絶される「主の僕」の贖罪的役割が求められるという神学的帰結を引き出している。この「主の僕」が、たとえば「預言者エレミヤ」のような実在の人物(預言者?)を想定したものなのか、これから登場を期待される架空の存在として描かれているのか、聖書学者の解釈は様様ではない。

**使徒書日課(使徒4章より)**

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として著された「初代教会正史」であり、初期教会において「使徒的共同体」としてのあるべき姿を示す意図で編集されていると考えられる。そこで、記述内容によっては、必ずしも単純に史実として固定概念化するのではなく、教会論的問題提起の材料として受けとめることが肝要である。

・日課箇所は、「聖霊降臨」によって始まった「宣教する弟子たちの教会」の経済的基盤を説明する部分で、教会が信者の持ち寄る財産を共有することによって営まれる「生活共同体」としての側面を持つことが、強調されている。この主題の記事は、後段(5:1以下)の「アナニアとサフィラ夫妻」の逸話と明確に結び付けられており、その逸話に対する解釈をあらかじめ用意しているものとして構成されている。すなわち、この「生活共同体」は、個々の信者が自分の所有物とされているものに対する自己主張を自発的に放棄し、それを自ら共同体の共有物のように扱うことによって成立するものとして考えられており、重要な点は、神の前に誠実な主体性の発揮である。

・このような「生活共同体」の成立する信者個々の姿勢は、彼ら自身の努力の賜物としてではなく、「聖霊降臨」で示されるような「神の恵み」の帰結として理解されている。(33節後半「皆、人々から…」は、「神の恵みが一同に豊かに注がれていた」の意識である)。「聖霊降臨」信仰による「神の恵み」への信頼が、相互の疑心を払拭し、信頼関係に基づく誠実な主体的態度を引き出している、と理解しているのであろう。

・そのような「使徒的共同体」を構成する信者の模範の一人として「バルナバ」が取り上げられている。バルナバは、エルサレム教会で信頼された人物で、アンテオキア教会に派遣され、そこからパウロらを伴った宣教団の責任者として送り出された、と描かれていく。「使徒言行録」における主要な登場人物の一人である。パウロは、書簡中でバルナバのことに繰り返し触れており(1コリ9:6、ガラ2章、コロ4:10)、パウロの伝道者としての姿勢がバルナバから学んだものであると推認させる記述が見られる。

**福音書日課(マタイ6章より)**

・日課箇所は、「山上の説教」の中盤、「施し、祈り、断食」の教えに続く一連の教えである。25 節以下のみが一つの教えのまとまりとして取り上げられることが多いが、「だから(ディア・トゥート)」で接続されているように、前段 24 節までで語られたことを受けたものである。

・日課箇所(22節以下)の直前に、「断食」についての教えと分けて扱われる「天に富を積む」ことの教えがある(19~21 節)。これは、「施し、祈り、断食」の教えを受け、それらが「隠れたところを見ておられるあなたがたの天の父が報いてくださる」(18 節)ようなものであるべきだというまとめを受けて、その「天の父の報い」の蓄えられるところとして、「地上」と対比的な「天」が示されているのである。そして、その「富」の所在をどこに認識しているかということが、人の心の姿勢を映し出していると指摘して、自己洞察を促している。

・このような文脈の中で、24 節「神と富とに仕えることはできない」は、「神」と「富」とを対立的に捉えるルカ福音書の並行箇所(16:13)とは異なり、「神」と「富」とを一致させることに焦点があると見ることができる。つまり、25 節以下で、地上における衣食に関する思い悩みを払拭するように促すことができるのは、神こそが人に「富」を与えられる方であるからだ。

・「思い悩む(メリムナオ)」は、「心配する」の意のほかにも「心を用いる／配慮する」という意味で肯定的にも用いられる(Ⅰコリ 12:25 など)。つまり、「思い悩む」という人の内的葛藤や関心傾向のあることを否定して「無の諦念」が求められているのではなく、21 節にもある「心の在り処」に対する自覚が求められている。

**来週の誕生日 (6月26日~7月3日)****主日礼拝の讚美歌から**

・21-8 番「心の底より」(= I 26 番「こころを傾け」)は、16 世紀宗教改革の時代にプロテスタント陣営の傭兵として生きたゲオルグ・ニーゲがルターの「朝の祝福の祈り」に触発されて作詞したとされる「朝の讚美歌」。曲は、民謡の旋律からの編曲。

・21-419 番「さあ、共に生きよう」は、ドイツで毎年行われている全国信徒大会 1983 年大会のために編纂された讚美歌集『いのちに立ち返ろう』から採用された讚美歌。

・21-451 番「くすしきみ恵み」(= II 167「われをもすくいし」)は、ゴスペルソング「アメージング・グレース」で知られる讚美歌で、作詞は、奴隷船船員として働いていた際に遭遇した暴風雨の中で回心し英国教会の司祭となったジョン・ニュートン。ウェスレー兄弟に続く世代で、彼らの影響を受けて伝道者になったと言われている。21-206「七日の旅路」、I 194「さかえにみちたる」なども作詞。曲は、19 世紀初頭から米国南部で歌われていた民謡が原曲。

**21-8「心の底より」****Aus meines Herzens Grunde**

1. Aus meines Herzens Grunde / sag ich dir Lob und Dank / in dieser Morgenstunde, / dazu mein Leben lang, / dir, Gott, in deinem Thron, / zu Lob und Preis und Ehren / durch Christus, unsern Herren, / dein eingebornen Sohn,
2. dass du mich hast aus Gnaden / in der vergangnen Nacht / vor G'fahr und allem Schaden / behütet und bewacht. / Demütig bitt ich dich, / wollst mir mein Sünd vergeben, / womit in diesem Leben / ich hab erzürmet dich.
3. Du wollest auch behüten / mich gnädig diesen Tag / vors Teufels List und Wüten, / vor Sünden und vor Schmach, / vor Feur und Wassersnot, / vor Armut und vor Schanden, / vor Ketten und vor Banden, / vor bösem schnellem Tod.
4. Gott will ich lassen raten, / denn er all Ding vermag. / Er segne meine Taten / an diesem neuen Tag; / ihm hab ich heimgestellt / mein Leib, mein Seel, mein Leben / und was er sonst gegeben; / er machs, wies ihm gefällt.
5. Darauf so sprech ich Amen / und zweifle nicht daran. / Gott wird es alls zusammen / in Gnaden sehen an; / und streck nun aus mein Hand, / greif an das Werk mit Freuden, / dazu mich Gott beschieden / in mein Beruf und Stand.

**21-419「さあ、共に生きよう」****Damit aus Fremden Freunde werden**

1. Damit aus Fremden Freunde werden, / kommst du als Mensch in unsre Zeit: / Du gehst den Weg durch Leid und Armut, / damit die Botschaft uns erreicht.
2. Damit aus Fremden Freunde werden, / gehst du als Bruder durch das Land, / begegnest uns in allen Rassen / und machst die Menschlichkeit bekannt.
3. Damit aus Fremden Freunde werden, / lebst du die Liebe bis zum Tod. / Du zeigst den neuen Weg des Friedens, / das sei uns Auftrag und Gebot.
4. Damit aus Fremden Freunde werden, / schenkst du uns Lebensglück und Brot: / Du willst damit den Menschen helfen, / retten aus aller Hungersnot.
5. Damit aus Fremden Freunde werden, / vertraust du uns die Schöpfung an; / Du formst den Menschen dir zum Bilde, / mit dir er sie bewahren kann.
6. Damit aus Fremden Freunde werden, / gibst du uns deinen Heiligen Geist, / der, trotz der vielen Völker Grenzen, / den Weg zur Einigkeit uns weist.

**21-451「くすしきみ恵み」= II-167****Amazing Grace! How Sweet the Sound**

1. Amazing grace--how sweet the sound-- / That saved a wretch like me! / I once was lost but now am found, / Was blind, but now I see!
2. The Lord has promised good to me, / His Word my hope secures; / He will my shield and portion be / As long as life endures.
3. Through many dangers, toils and snares, / I have already come; / His grace has brought me safe thus far, / His grace will lead me home.
4. Yes, when this flesh and heart shall fail / And mortal life shall cease, / Amazing grace shall then prevail / In heaven's joy and peace.
5. When we've been there ten thousand years, / Bright shining as the sun, / We've no less days to sing God's praise / Than when we'd first begun.